

俺は、アへ顔で叫び、見せつけられる興奮のあまり、前後に腰を思いっきり振りまくって自身のチンポを刺激していた。

パンツの先っぽは、ガマン汁でべっとりと濡れており、猿ぐつわからは、涎が滴っていた。

「いい・・・いい・・・いぐ♡いぐ♡いんぐう♡」ルキはだらしなく舌を出してよかった。

バッキンバッキンに勃起したデカチンはミカコの唾液でヌルヌルテカテカに濡れ光り、巨亀頭が、ぼわ！ぼわっ！と膨らんでいく。

「ぶぶぶば！ぶぶぶば！ふんぐう！ふんぐうううう★★！！」

（ごんぶと！ごんぶと！でっけえ！すんげええええ★★！！）

俺はたまらず、驚嘆の声をあげてしまう！！

「ああ♡あっ♡あっ♡・・・いく♡いく♡いっく♡くう～♡！どっぴゅうう～♡♡！！！」

ルキのデカチンは最大の勃起を見せ、亀頭が、さらに ぼわっ！と膨らんだ。

（うおお！！ルキ、イク！！）俺は膨らんだ巨根を見据えてひとりごちた。

次の瞬間、ルキはミカコのパイズリに耐えられず、射精した。

「どびゅっ♡！！ぶびゅっ♡！！ぶびゅっ♡！！・・・びびゅっ♡！！びびゅっ♡！！

どびゅっ♡！！どびっぴ♡！！どびゅっ♡！どびゅ♡！びゅ♡！びゅ♡！・・・」

凄まじい勢いでルキの巨根は吐精しまくった。

ミカコのデカパイの谷間から勢いよく小刻みに白濁液がどびゅ！、どびゅ！と噴水のように吹き出している。あっという間にミカコのデカパイはルキの精液にまみれた。

「はああ～ああ♡・・・ふふ、ふうううう～♡・・・き、きんもちいい♡♡」

ルキは足をビクビクと痙攣させながら、快楽の余韻に浸っている。

「はああ♡ルキ様あ♡すごい量♡！！！」

ミカコはデカパイと顔面にルキの射精を受け、恍惚の表情だ。

「やっぱりミカコは凄いや♡デカパイ、気持ち良すぎる♡」

ルキは優しくミカコの頭を撫でた。

イッたばかりなのにルキの巨根はビクビクと大きく勃起しており、大きく反り返っている。

ミカコは自身のデカパイに飛んだルキのザーメンを綺麗にすると、ゆっくりと立ち上がり、俺の方を向いて少し微笑むと、屈みこんで自身の足首を掴み、股の間から顔を出すと、

「ルキ様、オマンコにもオチンポを下さい♡」と色っぽく言った。

ミカコはルキに向かって巨尻を突き出すと、その尻をフリフリと揺らした。

「おわあ♡！！オマンコ、グチョグチョ♡！！ドエロ♡！！！！いただきますう♡！！！」

ルキはそう言うと大勃起した巨根を生で、バックから一気にぶち込んだ。

「ぬぷうう♡♡♡！！！」汁気を帯びたエロい挿入音がこだます。

「あぷう♡おっきい！！！！」ミカコは一瞬でめくるめいた。

だらしなく舌を出し、ミカコは快楽で恍惚な表情を見せた。